

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鎌倉時代における『選択本願念佛集』訓点本と仮名書き本の漢字音 : 仮名書き本に見られる親鸞の仮名遣い
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	国語と国文学 , 79 (7) : 55 - 66
Issue Date	2002-07-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00030569">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00030569</a>
Right	Copyright (c) 2002 Author
Relation	



# 鎌倉時代における『選択本願念佛集』

## 訓点本と仮名書き本の漢字音

——仮名書き本に見られる親鸞の仮名遣い——

佐々木 勇

### 一 本稿の目的

日本語史研究は、新資料の発掘・紹介によって、その幅をひろげてきた。近年では、仮名書き本と呼ばれる「仮名書き法華経」「仮名書き往生要集」「仮名書き観無量壽経」などの研究を、その一例として挙げる<sup>1)</sup>ことができる。

それらの研究には、仮名書き本は漢文に訓点を加点した本をもとに作成されているものの、宛字が多く、当時の口頭語が反映しているという指摘がある。一方で、『往生要集』の仮名書き本における再読字対応の語法では、漢文に訓点を付した同時代の諸本よりも、かつての漢文訓読における呼応を保存しており、「訓点本読み下し文よりも訓読的<sup>2)</sup>」との論がある。

よって、仮名書き本であるから、平易な言語・文章で書かれたと、単純には捉えられない。一々の文献につき、慎重な取り扱いが必要である。その位置づけができたならば、新資料として、さらに大きな力を発揮することであろう。

本稿では、仮名書き本の一つとして、これまで日本語研究資料とされることの少なかった、『選択本願念佛集』を取り上げる。

仮名書き本『選択本願念佛集』の漢字には、丁寧な振り仮名が存する。そこで、漢字音について、訓点本と仮名書き本とを比較することを、本稿の目的とする。

## 二 対象資料と方法

1 『選択本願念佛集』の古写本について

『選択本願念佛集』は、法然(一一三三—一二二二)の著書である。建久九年(一一九八)撰述とされる。

現存最古の写本は、京都廬山寺藏本(重要文化財)で、法然の直筆を残すものである。左に廬山寺藏本以下、比較的古い現存本を掲げる。

A 京都廬山寺藏本 鎌倉初期写本、鎌倉初期訓点。

B 当麻往生院藏本 一二〇四写本、一二〇四年頃訓点・鎌倉後

期訓点。

C 大谷大学図書館藏本 鎌倉初期写本、鎌倉初期訓点。

D 京都法然院藏本 延応元年(一二三九)刊本、鎌倉中期(江戸期訓点)。

E 東洋文庫藏本 上巻・延応刊本、鎌倉中期訓点(江戸期訓点もあり)。下巻・建長三年版本、弘安九年

訓点(江戸期訓点もあり)。

F 大東急記念文庫藏本 鎌倉末期刊本、南北朝期訓点。

廬山寺本はじめ、右の諸本は、和化漢文体で記されている。よって、法然が著した『選択本願念佛集』は、和化漢文であったと考えられる。また、一二三九年の版本(延応本)が現存することから、当時広く求められていたことが知られる。

このような状況の中、漢文『選択本願念佛集』を読み下した、漢字仮名交じりの「延書本」が生まれた。これも、本書を求める人の層が多様になったことを示すものであろう。

その延書本の主要古写本には、次のものがある。いずれも、残卷である。

① 専修寺藏本 正安四年(一一三〇)写本 下本・下末

② 龍谷大学藏本 南北朝期写本 本上・本中・本下・末上

③ 大谷大学藏本 室町時代初期写本 上本

延書本最古の写本である①専修寺藏本には、次の本奥書がある

( )内は、割書。以下同様。

正元元歳(一二五九)九月十日書之『愚禿親鸞(八十七歳)

③大谷大学蔵本にも、「正元元歳九月朔日書之『愚禿親鸞へ八十七歳』」の本奥書が存する。延書本諸本には、いずれも、漢字に丁寧な振り仮名が加えられており、この本奥書のとおり、親鸞書写本の姿を彷彿とさせている。ただし、親鸞(一一七三—一二六二)自筆の延書本『選択本願念佛集』は、伝存しない。

## 2 比較の方法

本稿の目的は、漢文訓点本と延書本との漢字音の比較である。

その前提として、漢文訓点本同士・延書本同士の比較がなされなければならぬ。

ところが、漢文訓点本には仮名音注が少なく、訓点本同士の内部比較により、共通性を見出すことがむずかしい。同じ理由から、漢文訓点本と延書本とから代表的な一本をそれぞれ取り上げ、比較することも、困難である。

そこで、延書本同士をまず比較し、延書本諸本の共通点・特徴を明らかにした上で、観点をしばって、漢文訓点本と比べるという方法を採りたい。

## 三 延書本の漢字音

### 1 延書本二本の本文比較——専修寺本と龍谷大学本——

ここでは、延書本の最古本専修寺本と次に古い龍谷大学本とを比較し、共通点・相違点を整理してみる。

先に見たとおり、この二本はいずれも完本ではないが、共通する部分が幸い存する。専修寺本の下本冒頭から四三丁裏三行目まで、龍谷大学本では末上の全体である。

専修寺本と龍谷大学本の本文・訓点の様子を示すために、共通する部分の冒頭掲げる。

〔専修寺本〕(下本冒頭から、行取りも原本のままに示す。)

選択本願念佛集へ仮字下本

念佛ノ行者・カナラス・三心ヲ・具足スヘキ文。

観无量寿経ニ・ノタマハク・モシ・衆生アリテ・

カノクニ、ムマレムト・ネカハムモノハ・三種ノ心ヲ・

オコシテ・スナワチ・往生ス・ナムラオカ・三トスル・一ニハ・

至誠心・二ニハ・深心・三ニハ・廻向發願心ナリ。

三心ヲ具スレハ・カナラス・カノクニ・生ス・同経ノ

疏ニ・イハク・一ニハ・至誠心・至ハ真ナリ・誠ハ実

ナリ・一切衆生ノ・身口意業ノ・所修ノ解

行・カナラス・真実心ノ中ニ・ナシタマヘルヲ・モチ

キルコトヲ・アカサムト・オモフ・ホカニハ・賢一善精一

進ノ相ヲ・現スルコトヲ・エサレ・ウチニ・虚仮ヲ・

イタケレハナリ

〔龍谷大学本〕(対応する部分を専修寺本の行取りに合わせて示す)

念佛ノ行者 カナラス 三心ヲ 具足スヘキ 文

観无量寿経ニ ノタマハク モシ衆生アリテ

カノクニ、生セント 願スレハ 三種ノ心ヲ

オコシテ スナハチ 往生ス ナニラカ ミツトスル ヒト

ツニハ

至誠心 フタツニハ 深心 ミツニハ 廻向發願心ナリ

三心ヲ 具スルモノハ カナラス カノクニ、生スヘ已上観

義ニ イハク 経ニ ノタマハク ヒトツニハ 至誠心 至

イフハ 真ナリ 誠ト イフハ 実

ナリ 一切衆生ノ身口意業ノ所修ノ解

行 カナラス 真実心中ニ ナシタマヒシヲ モチ

キニコトヲ アカサント 欲ス ホカニ 賢善精

進ノ相ヲ 現スルコトヲ エサレ ウチニ 虚仮ヲ

イタケレハナリ

両者を見比べると、右掲の範囲でも、次の相違点に気づかれる。

a 本文は、近似しているが、異なる部分も少なくない。

b 漢字に振り仮名を付す割合は、龍谷大学本が高い。

c 振り仮名に相違がある(専修寺本深心、龍谷大学本深心)

本稿では、c の中、字音注の相違が問題となる。

## 2 漢字音の比較

### A 比較方法

右に記したとおり、両本は、本文に異同があり、音注の密度も異なる。共通範囲での、仮名音注加点数は、専修寺本が延べ二〇九九漢字であるのに対し、龍谷大学本延べ二八六五漢字である。具体例をあげれば、専修寺本には、「佛」に加点例が無い。しかし、龍谷大学本は八〇例に「フチ」の仮名がある。また、専修寺本は、「一」にも加点例が無いが、龍谷大学本は六六例に「キチ」の仮名が存する。

そこで、共通範囲内で、当該字に対する仮名音注加点例を集め、両本の全例を比較する。そして、どの程度一致するのを見た上で、その作業によって見出される深心と深心などの両本相違例を集めて、考察を加える。

### B 比較結果

#### A 共通点

専修寺本と龍谷大学本との比較の結果、両者の仮名音注(専修寺本二〇九九、龍谷大学本二八六五)は、大部分一致した。

両本は、舌内入声をチで表記するのが原則であり、唇内入声はフ表記が原則である。m 韻尾をム・n 韻尾をンとする平安時代の表記法を基本的に守っている。

これらは、両本が書写された鎌倉後期・南北朝期の一般的な表記とは異なる。

さらに、両本ともに、いわゆる浄土真宗伝承音(水・住など)が見られる。

イ 相違点

右のごとく一致する中、相違が存したのは、次の二三字である(梵語音字は除く。「」内の数字は、複数例ある場合の用例数。以下同)。

	専修寺本(一三〇二年)	龍谷大学本(南北朝)
1 深(m)	シム[9]	シム[14]
2 殿(m)	コム[2]	シン[6]
3 音(m)	オム	コム コン
4 嫌(m)	ケム	ケン
5 嶮(m)	ケム	ケン
6 粟(m)	ホム	ホン
7 厭(m)	エム[2]	エン[3]
8 品(m)	ホン	ホム[2]
9 信(n)	シン[34]	シム シン[34]
10 愍(n)	イム[3]	イン[3]
11 恩(n)	オム	オン

12 勤(n)	コム	コム コン
13 潤(n)	ニム	ニン
14 類(n)	カム	カン
15 出	シュツ[5]	シュチ[6]
16 立	リフ[2]	リウ リフ
17 傾	クキヤウ	キヤウ
18 廻	クキヤウ	キヤウ
19 逆	クキヤク	キヤク
20 通	ツ[7]	ツウ[7]
21 仰	カウ	キヤウ
22 深	ケチ	クエチ
23 寸	シユン	スン

これらの両本相違例について、以下に考察を加える。

1~14までは、m・n 韻尾の表記の相違である。1~6は、専修寺本がm 韻尾をム表記しており、古用に適っている。7では専修寺本に一例のン表記が見られ、8では龍谷大学本が古用に適う。9は、n 韻尾の漢字である。こちらは、龍谷大学本の方に、古用に適う例が多い。

このように異なる例が存するが、全体としては一致例の方がはるかに多く、それらは、m—ム・n—ンとする規範に、大部分従っている。

その用例数を示せば、次のとおりである（異なり漢字数を先に、（）内に延べ数を記す）。

専修寺本                    ム表記                    ン表記

m 韻尾字                    一八（一二五）                    三（三）

n 韻尾字                    八（一六）                    七三（三六五）

龍谷大学本                    ム表記                    ン表記

m 韻尾字                    一三（二一七）                    一三（二二）

n 韻尾字                    三（八）                    八〇（四一四）

原則から外れる例も、両本で一致するものが少なくない。たとえば、n 韻尾字「煩」は、専修寺本で七例、龍谷大学本で六例のいずれも全加点例を「ホム」としている。

龍谷大学本に、m 韻尾字をン表記する例が比較的多い。これは、両韻尾音が統合される歴史的变化を反映するものであろう。

比較のため、親鸞遺文の中から、延書本『選択本願念佛集』執筆の一二五九年に近く、用例が多く得られる『西方指南抄』（二五六～五七年書写）の場合を、右と同様に記す。

西方指南抄                    ム表記                    ン表記

m 韻尾字                    四八（九三〇）                    四（五）

n 韻尾字                    二八（八〇）                    一八八（三三三二）

専修寺本の実態は、この『西方指南抄』に近い。

15 は、舌内入声表記の相違である。両本の舌内入声表記は、とも

にチを基本とする。これは、当時としては珍しいもので、親鸞遺文を想起させる。親鸞遺文では、チとされるものが一般的であるが、例外的にツとなる場合もある。出ツは、親鸞遺文でもシユツとされることがある（『三帖和讃』にシユツの例が二例存する）。よって、不徹底に見える専修寺本は、親鸞の表記をとどめている可能性が高い。

16 は、唇内入声の表記差である。唇内入声音のフ表記が定着すると、ハ行転呼を蒙るようになった。その結果、平安後期から、唇内入声音をウで表記する例が見られる。しかし、『選択本願念佛集』延書本二本は、フ表記が原則である。専修寺本は全例フであり、龍谷大学本もこの一例以外はフである。これも、親鸞の表記法に通じる。親鸞は、唇内入声フ表記を原則とした。親鸞筆『三帖和讃』では、全例フ表記である。ただし、『教行信証』その他の資料には、若干のウ表記例が存する。

17～19 は、合拗音表記の相違である。龍谷大学本では、イ列合拗音が直音表記されている。イ列合拗音は、鎌倉時代に入ると直音表記例が増加し、鎌倉時代後半期では直音表記が一般的となる。龍谷大学本の「キヤ」は、この流れに合っている。一三〇二年書写の専修寺本で「クキヤ」とされることに、特別な事情が存したものと考えられる。これも、親鸞の表記をとどめたものと考えれば、理解できる。親鸞は、『教行信証』で、「傾」(六本27・3。上は所在〈卷頁行數〉。以下同じ)、「迴」(三32・6)とし、『三帖和讃』で「逆」

(浄90・4ほか四例)としている。他の同韻字についても同様である。

20 「通」は、両本の七例がすべて相違する。専修寺本はツ・龍谷大学本はツウで対立している。鎌倉・南北朝時代の一般的な表記は、龍谷大学本のツウである。『類聚名義抄』和音・保延本『法華經單字』・心空撰『法華經音訓』でも、ツウとされている。

しかし、親鸞は、当時の一般的表記と異なり、「通<sup>ウ</sup>」としている。専修寺本のツは、親鸞の表記法を踏襲した可能性が高い。

21 仰カウ・キヤウは、対応する本文「珍仰スヘシ」における相違である。専修寺本は「チンカウ」とし、龍谷大学本は「チンキヤウ」としている。専修寺本は「仰」の呉音カウを、龍谷大学本は漢音ギヤウを示したものである。親鸞筆『西方指南抄』では「仰」への加点例全六例、『三帖和讃』では全二例に、専修寺本『選択本願念佛集』と同じく「カウ」とある。

22 「潔」の龍谷大学本クエチ、23 「寸」の専修寺本シユンは、不審である。それぞれ、唯一の加点例であり、その理由は、不明である。以上、相違点の考察を通して、専修寺本は、底本であった親鸞書写本の表記をとどめた点が多いと考えられた。

一方、龍谷大学本には、南北朝期の音韻を反映する表記法・当時一般の表記法が見られた。先に、龍谷大学本は、漢字に徹底して振り仮名を振ることを指摘した。龍谷大学本は、専修寺本と比べて音

注が多いばかりでなく、親鸞遺文と比しても多い。すなわち、親鸞書写の原本は、専修寺本のような状態であり、龍谷大学本は、後に振り仮名を補ったものと推測される。その際に、書写者による統一的な表記がなされた可能性が高い。

### 3 延書本『選択本願念佛集』の漢字音

延書本二本(専修寺本・龍谷大学本)の仮名音注は、基本的に一致した。右に掲げたわずかな相違例以外は、同一表記である。

延書本のもう一本として先に掲げた大谷大学蔵本室町初期点も、基本的には専修寺本・龍谷大学本と同様の仮名音注を有する。すなわち、「水」「住」「通」「風」とあり、舌内入声をチ表記し、唇内入声をフ表記する。m・n韻尾の書き分けも、室町初期としては異様なほど、正確である。

大谷大学蔵本室町初期点には、「呢<sup>チヤウ</sup>」(四八一)「哲<sup>チウ</sup>」(二七二、別筆か)など、書写者の表記法が表出したかと思われる例もある。しかし、仮名字体には、鎌倉初中期に用いられたものが見えることから、その頃の底本を忠実に写したことが推測される。

これら、『選択本願念佛集』延書本の字音注は、当時の延書本一般に見られるものではない。それは、同時期書写の妙一記念館本仮名書き『法華経』・浄福寺本仮名書き『往生要集』その他の仮名書き本と比較しても明らかである。



この、当時としては特異な、延書本『選択本願念佛集』の字音注は、専修寺本・大谷大学蔵本の本奥書に見られるとおり、親鸞書写本の正確な移点によって生まれたものと考えられる。

#### 四 訓点本と延書本の漢字音の比較

ここでは、漢文訓点本の漢字音を調査し、延書本の漢字音と比較してみた。

これまでの検討によって、現存延書本諸本の音注は、親鸞が書写した延書本に近いものであろうと推測された。

親鸞が延書本を著したのは、一二五九年であった。そこで、まず、親鸞延書本が生まれた年に近い、延応刊本（一二三九年刊）二本に加点されている鎌倉中期点について、調査する。

〔京都法然院蔵本〕

この本には、鎌倉時代中期から江戸時代に亘る数筆の訓点が存する。その中、複製本で判別できる範囲で、鎌倉時代中期の訓点を調査対象とする。音注の密度が低いため、専修寺蔵延書本に対応する本文箇所ばかりでなく、全巻を調査対象とする。

調査の結果、これまでの検討で問題となる項目で、用例が得られたのは、次の諸例である。

#### 1 m・n 韻尾の表記

m 韻尾字 粟あな(一四三二)

n 韻尾字 縷あな(一八三4) 椽あな(六五6) 淵あな(二八二5)

2 舌内入声音の表記  
詮あな(二〇一3) 愆あな(二一七4) 杆あな(二六一1)

3 唇内入声音の表記  
狹あな一少あな(一四七2) 業あな(一六七1) 執あな(一八九6)

〔東洋文庫(岩崎文庫)蔵本(二C b 8)〕

この本は、上巻は延応刊本・鎌倉中期点(江戸期点もあり)、下巻は建長三年版本・弘安九年(二二八六)点(江戸期点もあり)、という取り合わせ本である。上巻、鎌倉中期点の用例を次に掲げる。

#### 1 m・n 韻尾の表記

m 韻尾字 粟あな(一四三2) 湛あな(一九2) 嶮あな(一四五2)

暗あな(二一5) 驗あな(一三三2) 蔽あな(五〇3) 曇あな(五一6)

闇あな(一三九3) 焰あな(一四二3) 貪あな(一四六4) 染あな(一四七2)

n 韻尾字

畔あな(一四三1) 断あな(三6) 元あな(七2) 端あな(七5・九二・九二2)

鎮あな(一一4) 潤あな(一六3) 歎あな(九四3) 展あな(九八6) 詮あな(一〇〇4) 尽あな(一〇三2) 賤あな(一一二2)

關あな(一三八4) 專あな(二二2) 翻あな(二九2)

純(三二五・三七二) 健(三八六) 典(四一)  
亘(五一五) 単(一四二五)

2 舌内入声音の表記

哲(一八五・四九五) 悦(四九四) 殺生(一三二五)  
畢竟(二三二) 述(九二六)

3 唇内入声音の表記

接(八一三)

以上が全例である。

両本ともに、1 m・n 韻尾の表記では、ン表記例が主である。これは、m・n 韻尾音の区別が無くなった結果、ン表記に統一されようとする鎌倉中期の実態を反映するものであろう。

2の舌内入声は、法然院蔵本ではすべてツ表記である。岩崎文庫蔵本では、ツ表記に加え、促音のン表記およびいわゆる無表記とが見られる。これらも、当時一般の表記法である。

法然院蔵本の3唇内入声音の表記には、「狭少」の語中において、促音のツ表記例が存する。延書本では、専修寺本・龍谷大学本ともに、「狭少」である。

右のとおり、和化漢文に訓点を加点了法然院蔵本・岩崎文庫蔵本に加点了された鎌倉中期の字音注は、延書諸本と異なる。

しかし、右両本の用例数は少ない。延書本で問題とした項目で、加點例が得られないものもあった。

そこで、時代をさかのぼり、当麻往生院蔵本一二〇四年頃点をも調査してみる。この本には、比較的豊富な字音注が加點されているからである。

「当麻往生院蔵本」

全巻を調査対象とする。

1 m・n 韻尾の表記

用例数が多いため、用例数のみ表にまとめて示す。

△表記

ン表記

m 韻尾字

一(一) 一(一)

九(一五)

n 韻尾字

二(二)

八八(二四)

m・n 韻尾ともに、ン表記に移行する過渡期の様相を示している。

2 舌内入声音の表記

四七例がツ表記であり、チ表記は、「別」(九一)の一例のみである。「別」には、他に四例のツ表記例が存する(四三・七・四四・一〇九三・一六五三)。

3 唇内入声音の表記(当該字のみを掲げる。複数例存する場合は、「」内にその数を記す。)

フ表記 雑 攝[7] 合[2] 立[2] 執筆

ウ表記 雑 急 劫

ツ表記 狭 一少(二二二一)

フ表記が主である。しかし、ウ表記例も見られ、「雜」には両例が存する。これは、唇内入声音がすでに開音節化し、ハ行転呼の影響を受けた鎌倉初期の実態を反映している。<sup>(18)</sup>

また、法然院藏本鎌倉中期点と同じ箇所、促音をツとして、これは、延書本には見られないものであった。

#### 4 イ列合拗音の表記 廻キヤウ(一二四五)

右のとおり、「クキヤウ」ではなく、「キヤウ」である。<sup>(19)</sup>

#### 5 東韻直音の表記

「通」字に加点された全五例が、「ツウ」(九一・三五二・七八五・一六五三・一六九二)である。

以上、すべての項目において、延書本と一致しない。

この往生院藏本鎌倉初期点も、おなじく和化漢文訓点資料である法然院藏本・岩崎文庫藏本鎌倉中期点に合う。そして、それは、鎌倉初中期の一般的な漢字音表記を反映していると判断される。<sup>(20)</sup>

よって、本節で確認された『選択本願念佛集』の延書本と漢文訓点本との字音注の相違は、親鸞の表記法と当時一般の表記法との相違に基づくと考えられる。

## 五 結 論

本稿の目的は、原典を同じくする訓点本と仮名書き本との漢字音

を比較することであった。その対象として、鎌倉時代における『選択本願念佛集』を取り上げた。

比較の結果、次の点が判明した。

- 一 延書本同士・訓点本同士の字音注は、それぞれ共通性を持つ。
- 二 延書本と訓点本の字音注は、異なる。
- 三 延書本の字音注は、親鸞の音注をほぼ正確に伝えている。
- 四 訓点本の字音注は、加点当時の一般的な表記法に一致する。以上である。

『選択本願念佛集』の場合、親鸞から延書本が発生した理由から、親鸞の字音仮名遣いが延書諸本に伝承されることとなったと考えられる。

『選択本願念佛集』は、漢文本・延書本ともに、成立時に近い写本が現存する。そして、延書本は、親鸞独自の仮名遣いを保ったことを指摘できた。<sup>(21)</sup>

『法華経』『往生要集』など、他の仮名書き諸本の場合は、成立の事情が明らかではない。しかし、『選択本願念佛集』と同様に、仮名書き本成立時に、新たな規範が生まれたことも考えられる。仮名書き本は口語的な要素が強い、といった先入観で資料に対することは、危険である。

一々の資料について、今後、検討を重ねなければならない。

〔注〕

- (1) 中田祝夫編『仮名書き鏡無量寿經 知恩院藏本 影印と研究』(一九九一年、勉誠社)、古田恵美子「同文脈に於ける語彙の位相——『往生要集』訓点本と仮名書き本の語彙の訳し分けについて——」(『国語と国文学』六九一年一、一九九二年十一月)・同「仏典仮名書き本に於ける、元漢文の再読字に対応する語法について——主に『往生要集』の場合——」(松村明先生喜寿記念会編『国語研究』所収、一九九三年、明治書院、等同氏による一連の論文、西田直樹・西田直敏編『浄福寺本仮名書き』『往生要集』影印・翻刻・解説』(一九九一年、おうふう)、中田祝夫・小林祥次郎編『妙一記念館本 仮名書き法華経 研究篇』(一九九三年、靈友会)など。
- (2) 注(1)、古田の後者論文。
- (3) 記録によれば、建曆二年に、早くも開版されている。  
A 廬山寺藏本は、一九一八年、日本仏教法典会より複製公刊され、一九七九年には、法蔵館より複製公刊されている。B 当麻往生院藏本・D 京都法然院藏本は、一九八〇年に法蔵館より複製公刊されている。C 大谷大学図書館藏本は、一九七四年十月に大谷大学図書館から影印・翻刻・解説が刊行されている。その他、さらに多くの本が、藤堂祐範『選択集大観』(一九三二年、中外出版、一九七五年、山喜房佛書林再版)に紹介されている。
- (4) この三本は、『定本親鸞聖人全集』(一九七〇年、法蔵館)の底本とされている。①専修寺本は、『影印高田古典 第二巻 顕智上人集 上』(一九九九年、真宗高田派宗務院)で影印出版された。調査は、原本調査による。②龍谷大学本・③大谷大学本は、広島大学蔵の写真版に依る。なお、大谷大学蔵本については、金子彰・東京女子大学日本文学科学学生有志「大谷大学図書館蔵『選択本願念佛集』假字上本 語彙総索引稿」(『東京女子大学日本文学』第九二号、一九九九年十月)がある。
- (5) 『選択本願念佛集』に数種の異本があり、この両本が別系統であることは、すでに知られている。
- (6) 福永静哉「浄土真宗伝承音の研究」(一九六三年、風間書房)、吉沢義則「教行信証の訓点は板東語か」(『龍谷大学論叢』一九九三年四月)、高松政雄「『呉音』の中の異形——真宗伝承音より——」(『岐阜大学国語国文学』第三号(一九七八年三月)参照)。
- (7) 『西方指南抄』でも、「煩」は、全八例に「ホム」とある。また、10 恩(n)は、親鸞筆「教行信証」に「ヲム」の表記例があり、11 恩(n)も、親鸞筆「三帖和讃」には、オン・オムの両表記例がある。
- (8) 注(6) 吉沢論文、参照。
- (9) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(一九八六年、東京堂出版)二二三頁。
- (10) 注(9) 著書、二五七頁。
- (11) 『西方指南抄』では加点例至四六例、『三帖和讃』では全三例がツである。なお、『西方指南抄』『三帖和讃』では、同韻の「空」もクで一貫しており、クウとは書かれない。同韻拗音字の「風」も、フウではなく、フと表記している。中心母音uの字音には、ウを添えないという原則かと判断される。
- (12) また、龍谷大学本は、親鸞の表記法を必要以上に徹底させて、統一的に整理した点がある。舌内入声音をチ表記で通している点がそれである。さらに、龍谷大学本のm・n韻尾の表記も、南北朝期書写本としては、よく両韻尾を区別しており、音変化を反映した例ばかりでなく、表記法として、整えられている印象を受ける。
- (13) 注(1) 参考文献に所収の柴田昭二「字音資料としての妙一記念館本仮名書き法華経」、西田直敏「浄福寺本仮名書き『往生要集』の国語学的研究」、および諸仮名書き本の複製本、参照。
- (14) 親鸞以前に延書本があり、親鸞はそれを写したにすぎないという考

えがある(安井廣茂・宮崎圓選「字傳篇(一)解説」△定本親鸞聖人全集 第六卷「一九七〇年、法藏館」所収)。しかし、清水谷正尊は、『影印高田古典第二巻 顯智上人集 上』の解説中で、専修寺藏延書本は、親鸞が自ら延書した本を底本としていると結論づけた。親鸞がすでに延書されていた本を写したという推測の根拠は、清水谷論文によって否定され、親鸞特有の用字・表現が指摘されている。筆者も、このたびの漢字音の調査から、清水谷説を支持したい。

- また、字音注以外でも、親鸞独自の表記法を指摘できる。それは、「をば」「をや」「をか」などの連語となる助詞を「オハ」「オヤ」「オカ」と書くことである(言沢義則「親鸞上人の写語法」△龍谷大学論叢「一九二三年十月」、小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」△東洋大学大学院紀要「一九六五年九月、金子彰」親鸞の仮名遣い」△国文学攷「第七六号、一九七八年一月、参照)。ただし、専修寺本は、これが徹底しているが、大谷大学本には異例があり、龍谷大学本にはこの表記が見られない。この点からも、専修寺本が親鸞書写本にもっとも近いと言える。
- (15) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(△広島大学文学部紀要「特輯号3、一九七一年三月)、三保忠夫「漢字音の促音化とその表示法——お茶の本図書館蔵光明真言土沙勤信記による——」(△鎌倉時代語研究「第二輯、一九七九年三月)、沼本克明「平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究」(一九八二年、武蔵野書院)など、参照。
- (16) これに比して、延書本が漢字音資料として価値が高いことがあらためて確認される。

(17) この本に加点されている鎌倉後期点は、今回の調査から除外する。なお、鎌倉後期点は、左側に加点されているものが多い。また、巻末は二二〇四年頃点が減少し、鎌倉後期点が増えている。

(18) 「ケウ」とされるべき肴韻の「楽」に、「ケフ」と加点した例が本資料にある(二〇一)ことも、これを裏付ける。

(19) ただし、鎌倉後期点かと判断される後筆には、「傾」(二〇八三)の例が存する。本稿の結論から、延書本の親鸞の表記法が、鎌倉後期点に入った可能性を推測できる。

(20) 伝存最古の廬山寺藏本鎌倉初期点には、「呢」(二六二)しか仮名音注例がない。ただし、これも古内入声音をツ表記した例である。また、大谷大学図書館蔵鎌倉初期点にも、わずかな加点例の中に、m韻尾字「簪」に対して「セン」とする例がある。

(21) 延書本で、いつまでこの表記が伝えられるのかは、不明である。注(3)『選択集大観』所収図版の江戸期延書本(版本)を見る限り、親鸞の仮名遣いではない。

〔付記〕 学生を伴っての原本調査をご許可下さった専修寺当局、ならびに写真複写をお許し頂いた東洋文庫・龍谷大学図書館・大谷大学図書館に、心より御礼申し上げます。

—— ささき・いさむ / 広島大学助教授 ——